

データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム

牛尼 剛聡

九州大学



データ工学研究専門委員会 (DE研) では、日本データベース学会及び情報処理学会データベースシステム研究会と共催で「データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM)」を毎年開催している。本フォーラムは、1990年にDE研が開始したデータ工学ワークショップ (DEWS) を母体として発展してきたものであり、当初は数十名規模であったが、2009年より現在の名称となって以降、参加規模は年々拡大している。

DEIMは、元々2泊3日の宿泊形式で、寝食を共にしながら活発な議論を交わす合宿型の研究会として運営されてきた。しかし、コロナ禍をきっかけに従来の形式の継続が困難となり、日本で初めて大規模なオンライン学会へと舵を切った。オンライン形式となったことで、対面での直接的な交流機会は減少したものの、発表や聴講の利便性が大きく向上し、より多様な研究者・学生が気軽に参加できる場へと進化した。

こうした経験を踏まえ、2023年からは、オンラインによる口頭発表とオンサイトでのポスター発表を組み合わせた直列ハイブリッド形式を導入している。DEIM2025では、全429件のうち、386件がオンラインでの口頭発表とオンサイトでのポスター発表の両方の発表を行った。まずオンラインで幅広く発表と議論を行った後、週末を移動日とし、続くオンサイトでは現地で対面による議論と交流を行う。このハイブリッド運営により、オンラインとオフライン双方の利点を最大限に活かしつつ、参加者のワークライフバランスにも配慮した柔軟なスケジュール設計が実現されている。

第17回となるDEIM2025は、2025年2月27

日 (木) から3月4日 (火) にかけて開催され、オンラインと福岡国際会議場でのオンサイトを合わせて合計840名が参加した。オンライン開催期間中は、11パラレル・9タイムスロットに分かれて合計96セッションの口頭発表が行われ、Zoom Events や Slack などのツールを活用した柔軟な参加形態の下、活発な議論が展開された。その後のオンサイト期間には、午前・午後にわたるチュートリアルやランチョンセミナー、インタラクティブセッション、BoF (Birds of a Feather) など多彩なプログラムが組まれた。BoFセッションでは、「DB 談話室～研究者としての生活の『リアル』～」といった学生企画や、博士課程の体験談・知見共有など、様々な立場の参加者が主体的に交流し合う場となった。

DEIMのもう1つの特徴は、座長・コメンテータ制度にある。発表ごとに座長のほか、関連分野のコメンテータが事前に予稿論文を精読し、当日は建設的な助言や指摘を積極的に行う。特に学生・若手研究者の育成を重視したこの仕組みによって、発表者の研究を更に発展させる場としての機能を強化している。学生による発表が多いのもDEIMの特徴であり、例年2月末から3月初めの開催という日程もあいまって、学部4年生や修士課程の研究成果が多数発表される。DEIM2025でも、429件の一般発表のうち394件が学生によるものであった。

更に、DEIMではスポンサー企業による技術報告が一般の研究発表と同じセッション内で行われている。これにより、学術研究者と企業技術者が同一テーマの下で発表・議論を交わすことができ、理論と実践、研究と現場の両面から話題を深

掘りする場が自然に生まれている。企業発表に対しても、研究者や学生から積極的な質問や意見が寄せられ、発表者と聴講者の立場を超えた双方向的な議論がDEIMならではの風景となっている。このような取り組みは、研究成果の社会実装を加速するだけでなく、現場で求められる課題やニーズを研究側が把握するフィードバックループとしても大きな意義を持つ。DEIMは単なる学術発表の場にとどまらず、産学連携を促進するプラットフォームとしても機能している。

また、DEIMでは企業からの協賛を受け、多くのスポンサー企業賞が設けられている。これはスポンサー企業が独自の視点で優れた研究発表やポスター発表を選出し、企業賞として表彰するものである。企業賞は、学会としての各種アワードとは異なり、産業界のニーズや技術トレンドを反映した評価がなされる点に特徴がある。受賞者には企業から副賞が贈られるだけでなく、受賞をきっかけに産学の交流やインターンシップ、共同研究など新たなつながりが生まれることも多い。こうした企業賞の設置は、参加者にとってモチベーションとなるだけでなく、企業と研究者・学生との距離を縮める貴重な機会となっている。

DEIM2025では、AI時代の技術動向や研究分野の基礎知識を体系的に学ぶためのチュートリアルが計5件実施された。生成AIの社会実装と法制度、Vision-Language Modelと自動運転、表形式データへのLLMの応用、グラフデータ分析における公平性、DXを支えるクラウドネイティブ技術など、AIとデータ工学の融合領域を意識したテーマが多く、いずれも参加者同士の活発な質疑やSlackでの議論を通じて深い理解と交流が生まれた。こうした取り組みは、DEIMが単なる研究発表の場にとどまらず、研究者・技術者が互いの専門知識を持ち寄り、共同で問題意識を深める場として機能していることを象徴している。

近年、AI技術の飛躍的發展に伴い、学習デー

タの取得・整備・管理が研究開発における重要課題となっている。DEIMは創設以来「データ工学」を核とし、データガバナンス、スケーラブルなデータ処理、プライバシー保護など、AI時代の基盤技術を議論できる国内最大級のフォーラムとして存在感を高めている。近年ではベクトルデータベース、RAG、LLMのファインチューニング基盤など、データベースとAIが交差するテーマも急増しており、トップ会議を目指す若手研究者がDEIMで初期アイデアを発表する流れが定着している。

DEIM2025は、オンラインとオンサイト双方の利点を活かした運営により、全国各地から多様な参加者が集い、有意義な議論と交流が展開された。DEIMは「開かれた学会」を目指しており、分野や所属に関わらず、データ工学や情報マネジメントに関心のある研究者や企業の方々の参加を心より歓迎している。本原稿をお読みになり少しでも御興味を持たれた方は、是非DEIM2026で発表や聴講に御参加頂き、活発な議論や新たな交流を共に楽しんで頂ければ幸いである。

